

---

# 『merchant of death 死の商人』

A5

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「merchant of death 死の商人」

### 【NZコード】

N1575E

### 【作者名】

A5

### 【あらすじ】

麻薬に頭を犯された少年は、知らないうちに危険な世界へと巻き込まれ。気がついた時には抜け出せない状況に陥ってしまっていた。

## 赤い一話（前書き）

過度ではありませんが、狂った表現や暴力的なフレーズが見え隠れします。

苦手な方はご注意を。

## 赤い一話

ああ、やつと死ねるんだなあと思つた

こめかみにひんやりした銃口を突きつけられて、正直に気持ち良いなと思えた

今に、その魅力的な小さい穴から黒光りする弾が飛び出して、腐りきつた俺の脳を飛び散らせる

俺の血の色つて赤いかな？　いや、黒いかも　　違うな、きっと  
縁だ

笑いが止められない　クスクスと笑つてしまつてはせつかく俺を殺そうとしてくれた相手に失礼だ

少しば怖がる態度でも見せた方が良いかな？　それが礼儀つて奴なのかもしれない

世間の礼儀つてやつは良く解らないけど、今は怖がった方が可愛氣ある男に見えるんだろうなあ　助けてとか言ってみようかなあ  
可愛い奴だつて思われたいなあ

「デモなあ、笑いが止まんねー　どうしよう、すげえ……

すげえ楽しい

「赤い」

銃を持つ咎人は言った。壊れかけた廃墟と飢え死にしたネズミの転がる素敵な夜景の中、ポツリと生み出された言葉はそのまま消えた。銃を突きつけられた青年は、咎人の言葉を汲み取る事無く、至福の時は今かと薄ら笑つて大人しく待つている。

ハチドリが一百回羽ばたく程の間を置いてから、青年は思い出した様に口を開いた。

「何が?」

「君の髪、此処赤い」

黒き影に隠された咎人の目がギョロリと動き、未だ笑顔のままの青年を舐める様にジットリと見つめる。咎人が口を開くたびに血にそまた様なショツキングレッドの口が形を変えて、音色の様な声を作った。その赤といえば、毒蜘蛛が体に貼り付けた警告色の様だ。

俺に近づけば死んじゃうよ。この鋭い牙で噛み付くよ。毒はね、体中にまわって血液の流れを遅くしちゃうんだ。きっと初めは苦しいよ。けどだんだん気持ちよくなつてくるから。頭がボーッとして、とっても気持ちいいよ。ほらほら、噛まれにきなよ。毒で死んじゃうよ。噛まれにきなよ。

毒蜘蛛が軽快にステップを踏みながら咎人の横で踊っていた。可憐な声で誘惑し、自堕落なセリフで心を揺さぶった。

「あー。なんだあ髪があ。血の話しかと思つた。俺さあ、気がつかないうちにもう撃たれたのかつて勘違いしちゃつた」

悪戯な笑いを含んだ声で返答しながらも淫靡な青年はすぐに蜘蛛の姿を追つようになり、とつとう自分から毒を流されにいった。

赤い赤い警告色に卑猥な妄想を膨らませ、蜘蛛に噛み付いた。

咎人はギョロリとした大きな目をよりいつそつ大きく見開いた。震撼した咎人はいきなり唇に噛み付いてきた青年を足で蹴り飛ばす。精悍に口を拭つた咎人は青年に叱咤をするべく銃口を向けなおして、彼の眉間に狙う。蹴り飛ばされた腹を押さえながら、青年はさつきまでの人懐こそうな笑顔をやめて攻撃的な視線を暗闇に隠れる咎人の顔へと送らせる。

「何すんだあ……？ あんたが誘つたんだ。噛まれにきなよつて言ったる？ 言つたじやん」

独り言のよう<sup>1</sup>に咳きながら、青年はクルクルと表情を変えた。不安な顔をしてみたり、クスクスと屈託なく笑つてみたかと思えば、次の瞬間には親の仇にでも会つたかのような憎悪を露わにしている。

「麻薬の味がする。頭がやられたのか？」

## 一話・犯された彼

青年は麻薬常習犯だつた。ありもしない幻覚に惑わされ、聞こえもしない幻聴に返事を返す程に青年の頭は薬に犯されてしまつてゐる。今も彼のポケットには飲み薬タイプの麻薬がどつさり入つてゐる。ついさつき売人を斬り殺して手に入れた代物だつた。

「お前も俺を馬鹿にすんのかあつ。麻薬も止められないダサイ男だと思つてんだろーがつ。さつきからずつと俺のこと見下ろしやがつて、死ね、カスツ！」

咎人は一度も青年を見下ろしてなどいない。それどころか、頭ひとつ分程背の低い咎人を見下ろしてゐるのは長身の青年の方だつた。しかし、そんな正論を述べたところで青年に伝わるはずが無い。一から十までとしたのなら、三ぐらいまでは伝わるだらうか？ それも、咎人が丁寧に根気良く青年と話を続ければの話だ。もちろん咎人にはそんなことをしてやる義理も無ければ、義務もない。それで、咎人は一つだけ青年に対する感情を持つていた。

ギョロリとする目が、また青年の体のラインにそつてゆつくりと動いた。

綺麗な人だ

咎人は美しいものが好きだつた。

汚れた自分の人生を塗りつぶしてくれそうな「美」をいつも探し回っていた。

今夜も仕事帰りにたまたま通りかかった路地で、この青年が走つて何処かへ消えて行く姿を見つけ、美しいと思ったから織ってきた。

青年が何かから逃げる様にして入り込んだのは、光で溢れた繁華街からさほど遠くない大きな廃墟。月明かりが何本も細く差した部屋に落ち着くと、ネズミの死骸を踏みつけながら中央にあるソファまで歩いていき、グッスリと寝入ってしまった。

整った顔が安心しきつた寝顔をさらすと、まもなく咎人が足音を立てずに部屋へ無断侵入をしてくる。美しい顔を近くで見ようと吐息が聞こえる程に近づいた咎人は、ますます彼の美の虜になつていった。

黒髪の中に一筋際立つ赤いメッシュが入った髪を素敵だと思い、指を滑らせてみてがつかりした。ろくな手入れをしていないのである青年の髪は、素敵なのは形だけで、良く見れば痛み放題、枝毛もたくさん見つかった。もし自分なら、こんなに美しい容姿を無駄にしないよう、毎日丁寧で細やかなケアを怠らないのにと心の中で悪態をついた。

それでも、咎人の心は晴れやかだつた。少なくとも仕事を終えた時の状態と比べれば、今は比べ物にならないほどに快調だ。美しいものは心を洗つてくれる。咎人は小さく美しい人へ礼を述べ、そつと傍を離れた。

最後にもう一度だけ青年の顔を見ようと、出口付近で振り返つて驚いた。青年はへらへらしながら咎人の後をピッタリくつついて来ていたのだ。

咎人のプライドが傷ついた。

仕事柄、気配を察知するのは得意なはずなのに、いとも簡単に見ず知らずの男に背後を取られたのだ。短い舌打ちと共に、この青年を撃ち殺すつもりで銃を素早く構えた。

それなのに、引き金にあてられた指は咎人の命令を無視して、伸縮を止めた。

銃を向けられた青年は恐怖に凍りつくか、または急いで逃げ出すだろうと思つた。

しかし彼は銃に気がつくとしばらく考へるように小首をかしげ、やがて自分から顔を横にしてこめかみを突きつけてきた。薄つすらと笑顔さえ見せて。

結局まだ死ねない青年は今ヒステリックに奇声を上げたまま、頭を抱えてブンブンと振っている。まるで、ロックバンドに良く見られるヘッドバッキングの様だ。おまけにボーカルながらにシャウトまでかましているのだから、もうそれにしか見えない。

しばらくそうしていると気分が落ち着いたのか、パッと顔を上げて自分を狙う銃口に笑いかけた。まるで恋でもしているかのようにそつと手を差し伸べて、指で銃口をなぞっている。

「チヨーダイ」

子供のように片言で一喝した青年は、キラキラと目を輝かせてご機嫌に振舞っている。

ちょうどいとはつまり、引き金を引いてくれという意味なのだろうか？ それともこの銃 자체が欲しいのか。

どちらにしろ、もう咎人には青年のお願いをかなえてやることができないさそうだ。

殺すこともできない。銃も渡せない。

早々にこの場から立ち去ろうと、咎人は砂利を踏みつけながら一步を引いた。しかし、青年はそれを許すまいと咎人に抱きつき、必死に置いていくなと駄々をこね始める。

仕事柄、そんな青年を一人押しのけるくらいは余裕のはずだ。それでも咎人は青年の美にあてられて体を上手く動かせなかつた。長く無言で抱きつかせてやつていると、咎人は新しい事に気がついた。青年の服は髪と同じで見た目だけが良く、実際は生地も薄い安物で、こんな寒い季節には辛いであろうと思われる代物だつた。ついでに言えば、香水のセンスもあまり良くない。きつすぎる匂いに、咎人は眉を寄せた。

もし、自分だつたらこんな容姿を無駄にしない行動をとるのに。自分に任せれば、この人はもつともつと美しくなるに違いない。ずっと探していた最高の美に出会えるのかもしぬない。

気づけば咎人は、青年を廃墟から連れ出していた。逃がさないようにしてかりと手を握り締め、足元がおぼつかない青年をグイグイと引っ張り、自分の家へ連れ込んだ。

まず何から始めさせるべきだろうと咎人は自問した。お気楽な青年はやはりへらへらと笑いながら、めずらしそうに家中を行つたり来たりしている。何に興味を引かれたのか解らないが、何度もトイレのドアを開けていた。

奇行を繰り返す青年を見つめているうちに、まずは薬を止めさせる事からだと気がついた。咎人は青年のもつとも興味を引く物。銃を

餌に自分のところへおびき寄せた。チラチラと銃を見せれば、青年は嬉しそうに寄ってくる。目の前で行儀良く座り込み、愛らしい笑顔で殺してくれるのを待っていた。

咎人は青年の額に銃口を当てながら自分もしゃがみこみ、話しかけて意識をそらしながらそつと薬が見え隠れするポケットに手を突つ込む。全てを抜き取ると、ソレを全て自分の懐へと隠し、銃もしまつた。楽しい玩具を取り上げられて、青年は不機嫌に床を何度も叩いたが、咎人は銃を出さなかつた。薄暗い部屋の奥へ一度引っ込むと、錠剤を持つて青年によつてくる。

「撃つてー。撃つてえつ。俺のこと早く殺しちまえよ」

人事のように死の催促をする青年は、咎人の脚にすがりつき、黒いスースが破けそうになるくらい滅茶苦茶に引っ張つている。

「やめろ、醜い。それよりもこれを飲め」

冷たくあしらつた咎人の手には白い錠剤が一つチヨコンと乗つっていた。

一つは青年の所持していた麻薬と極似したもの。もう一つは睡眠薬だった。仕事柄薬も良く扱う咎人は、青年の麻薬と良く似た少し効き目の薄い麻薬と、落ち着かせるための睡眠薬を持ってきたのだ。少しずつ薄い薬に変えて麻薬をやめさせようと試みた咎人の判断は、壊れかけた青年に受け入れてもらえたようだ。もとい、彼は何も意味がわかつていないので……。

ぐつすり寝入つた青年にかけ布団をしてやると、咎人も寝室へ姿を消した。

床にごろ寝をしていた青年は翌朝早い時間に目が覚めた。痛みを覚える腰をさすりながら、朦朧とする意識で此処は何処だろうと考えた。しかし、それよりも薬を飲みたいと思い、ポケットに大量に入っていたはずの麻薬を探した。しかしポケットの中身は空だ。なぜ

かワインのコルクが一つ入っているくらいで他には何も入っていない。そういえば昔、自分の排泄物からコルクが出てきた時は驚いた。薬と間違えて飲み込んだのだろう。不機嫌にコルクを部屋の隅へ投げつけると、青年はポケットを裏返しにしながら再度薬を探した。

「あー…れーえ？」

いつも薬が切れる前に補充作業を行っていたはずだ。探したときに薬が無いなんてことはなかった。仕方なく、青年は本題に戻ることにして周囲を見回した。この嫌に片付いた部屋はなんなんだろう？ 鼠の死骸一つ落ちていない、整理された部屋は汚れなど少しも見つからなかつた。自分がいるだけでこの部屋を汚しているような気になつて、青年は居心地が悪そうに立ち上がる。

部屋を出て廊下に出ると美味しそうな匂いが漂つてきた。こんな匂いは久しぶりに嗅いだ。最後は確かレストランの裏手で金持ちを恐喝したときだつただろうか？ 匂いに誘われるままに足を進めると、やはり綺麗に片付いた台所にたどりつく。そこでは見ず知らぬ人物が大量の食材を料理に変えている真つ最中だつた。

「よく寝ていたな」

青年が話しかけるよりも早く、その人物が背を向けたまま切り出していく。茶髪のショートカット。後ろからでは女性なのか男性なのか解らなかつたが、彼女の声は涼やかで、男の硬骨な声とは違つた。ますます青年は訳がわからなくなつてしまつ。自分にこんな女友達がいただらうか？ 煙で声がつぶれた女性や、幼い時からの薬の服用で妙に背の低い女性、金のために片目を売つてしまつた女性等などのたぐいならそうそう不思議でもなかつたが、見たところ彼女は常識人の様だ。この場所も、間取りから高級アパートのたぐいだと解つたし、少なくとも人生をだらしなく生きている部類の人間では無いだろう。

青年は彼女へかまをかけてみた。

「昨日は楽しかつたな……よな?」

「なんの話だ」

はづれ。んー。と声を漏らしながら青年は苦悶の表情を見せた。

「誰だよ、」「いつ。あー、もー。薬飲みたい。此処何処? 料理美味そう。

もともと麻薬に犯された脳が正常に機能を活躍させるはずもないのだ、たとえ彼女と面識があつたとしても考えるのは無駄だろ。頭で理解できなくても、経験で十分理解できていた青年は素直に白状しあげ始めた。

「ねー。俺、あんたのこと覚えてないんだけど。俺とあんたって寝たのかなあ?」

青年の人間分類はそれしかなかつた。寝た奴と寝てない奴。「キスをした」

「あー、寝たの。じゃ、お友達か」

「それだけだ」

「んー。えー。うそー」

人間分類が一項目しかない青年にとつてこれは大問題だつた。また苦悶に喉をうならせる。

それでもやはり、一つのことを長く考えていられない青年はしばらぐするとキヨロキヨロと辺りを見回し突然見え始めた小鳥さんを田で追つた。小鳥さんはダイニングテーブルの料理を美味しそうにいばみ、楽しそうに歌を歌つてゐる。

「で、俺は朝、ご飯を一緒にさせてもらつていーんですけど?」  
言いながら返事をまたずに、青年は一つ焼きたてのパンを取り上げた。

今しがた出来たばかりの料理を持ったまま振り返った女性は、返事も待てない青年にあきれたようなため息をついて、どーぞと短く答える。

配色も考えられた久々の朝ご飯を、青年は嬉しそうにたいらげた。そうしてやつと落ち着いてきた腹を押さえながら、女性のついでくれたコーヒーを一気に飲み干すと、椅子に背中を押し付け大きく伸びをする。

「あんた良く見たら良い女」

上に思い切り伸びあげさせた手を下ろしながら、突然青年がそう言った。女性はたいして興味がなさそうに終わつた皿の片づけを始めている。

「じゃ、とりあえず体力もついたし、俺とお友達になつとこーか？」青年にしてみれば根気良くな話しかけた方なのに、女性は未だ皿を片付けている。青年は話しかけることをあきらめ、ボーッと女性の行動を見ていた。

いつもならば一人分の皿洗いが、今日は二人分。女性はほんの少し予定時間をオーバーして皿を片付け終わる。ダイニングテーブルを拭こうと布巾を持ってまた青年の傍まで戻ってきた女性は同時に白い薬も持つてきた。

「あらら。あんた普通の人じゃなかつたんだ？ こんな危ないもん持つていちゃいけませんねー。片付けてやるから感謝しな」

女性が飲めと言う前に、青年は女性から薬を奪い取つた。自分の麻薬を彼女に取られたとも知らずに、青年は得したかのような表情を作つて見せる。口の中で麻薬を転がし、噛み碎いた青年の目がトロンとしてくる前に、女性は話を切り出した。

「お前に帰る所はあるのか？」

素直に帰るところがあるのなら帰してやろうと思っていた。そして反面、帰るところが無いのなら、青年を絶対自分の着せ替え人形に

してしまおつとも企んでいた。この女性もまた、堕落した人間だつたのだ。青年の思うような正常で普通の人間では消して無い。彼女の淫乱なる裏の思考に気がつく」となく、青年は素直に無いと答えてしまつた。

「昨日まで置いてくれる先輩いたんだけひひー。しふしふしゃつて、追い出されちやつた」

「交換条件で此処に置いても良い。行くところが無いのなら考えてみないか？」

だいぶ薬が効いてきて、虚ろな目を見せ始めた青年は特に考へることも無くいる「るー」と答え、へらへら笑つてみせた。交換条件という言葉が本当に聞こえているのだろうか？

「条件だ。お前の髪型、服装、爪の一枚にいたるまで身の回りの事は全て私がやる。お前は素直にそれに従うだけで良い」

理解するために頭をどう処理して良いのか解らず、青年は少しの間困つた顔をしていたが、やつと意味が解るとギョッとして身を引いた。

「は？ あんた変態？ やだね。そんな囚人生活。俺は好きなように生きて、好きなことをして過ごしたいんだ。はい、交渉決裂、止め止め、さよなら、お元気で」

麻薬が効いてきた青年は少し攻撃的な態度で椅子から離れ、玄関のドアを開け放しで出て行つてしまつた。

女性は焦つた顔を見せるでもなく、そのまま普通に仕事へ出かけて行つた。

女性が真夜中になつて帰宅すると、青年が玄関先で座り込んで待つていた。

「寒い、遅い、腹減つた、飯作れ」

青年の声は低く、酷く機嫌が悪そだ。女性は青年の前で初めて笑顔を見せる。それも、勝ち誇つた嘲笑の笑みだつた。青年の機嫌は

さらに悪化し、勢い良く立ち上ると女性の黒いスーツの襟を思い切り引つかみ、自分の方へ引き寄せる。

「何が可笑しい？　お前が身の回りの世話をするつったんだろ？」

それから薬よこせっ！」

青年の機嫌が悪いのは麻薬のせいだった。いつもならすぐに見つかるはずだった麻薬の売人が今日にかぎって全然見つからないのだ。偶然出会った麻薬仲間に尋ねると、どうもここら辺一帯に変な噂が出回っていると言う。売人を食い物にしているグループが出来ただとか、麻薬を手に入れるためなら手段を選ばずに片つ端から殺しをしている奴がいるだとか、警察が嗅ぎ付けておとり捜査を行つている真つ最中だとか……沢山ある噂の中からいくつかは思い当たるふしあつたが、そんな噂だけで売人が忽然と姿を消してしまった珍しいことで、青年には解決策も無かつた。麻薬を持っていた彼女のところへ転がり込むこと以外には……。

女性はやんわりと青年の手を離すと、玄関のドアを開けて先に入る。後からついてきた青年に振り返り、また開け放しのままにしようとした青年を叱咤して台所へ向かつた。ピッタリくついてくる青年は繰り返し、薬をよこせと催促している。

売人が街から姿を消した原因がこの女性にあると、青年は気がつくはずもなかつた。昨日、青年が女性の家で寝入つた後、この青年を事実上の上で拘束するために女性はテキパキと事を進めていたのだ。仕事のつても使って、売人達に変な噂が流れる様に仕組み、青年が麻薬を簡単に手に入れられない様に仕組んだ。罠にはまつた獲物は、今こうして自分の後ろをのこことついてきている。次に女性がすることは餌付けだった。

「お、解つてらつしやる。女王様」

涼しい顔で、女性は胸ポケットから麻薬を取り出した。飢えた獲物はギラギラした目で餌に食いつき、自ら女性の罠の深みにはまつて

いく。

「食事を作る。その間にシャワーを浴びて来い。お前の髪は恐ろしくらいに痛んでいるから、ダメージケアのシャンプーを使え。その後にトリートメント剤をなじませて、次にコンディショナーを…」

「……ん?」

間の抜けた声が廊下に響いた。冗談や、反抗などではなく、本気で解らなかつた青年は戸を開いてポカンと女性を見つめている。初めての命令は、少し青年にとつて難しかつたようだ。女性は風呂のドアを開け、言い方を変えた。

「右から順番に使えば良い。最後のは使うな。三つ戸までだ」

「あー。うん。あ、そう。解つた解つた」

女性の会話についていくことが面倒くさくなつたのだらう。あきらかにその場しのぎの返事をするとスタスタと浴室に入つていいく。青年がドアを閉めたかと思うとすぐにまた開いて、ひょっこり愛くるしい笑顔が出てきた。

「なんか良くなきゃ、一緒に入るつか?」

「馬鹿を言つな」

女性は勢い良く浴室のドアを閉めなおした。ゴンと派手に音が聞こえたから、青年が頭をぶつけてしまったのだろう。女性はかまわず台所の方へと姿を消した。

料理は女性の数ある趣味の中の一つだった。彼女は何にでもめり込んでいくタイプで、一度始めた事は最後までやらないと気がすまない。そのため、この家の台所には膨大な種類の調味料だけではなく、女性が手を開いたぐらい刃がある斧の様な包丁から、剃刀の様な小型包丁までズラリと並び、下手をすると石包丁まで見つけてしまうそうな勢いだ。

包丁と同じように多種多様の鍋から適切な物を一つ選び出し、それに下ごしらえの済んだ食材を丁寧に放り込んでいくと、魔法のように料理に変わつていった。

一人分だと何かと不都合の多い料理も今日からは一人分で良いのだと思うと、少し嬉しくなり気合も入つてくる。すでに出来上がった料理に女性はあらゆるトップピングを乗せて、出来上がったばかりの料理を次々にテーブルへ運んでいく。

何度かそうして最後の料理を運ぼうと思い、後ろを振り返った女性は絶叫をあげそななくらいに驚いた。また、気配も無く半裸の青年がすぐ後ろでへらへらと笑つていたのだ。随分とさつきの麻薬が効いているらしい青年は、幼い子供のそれらしく、大きく両手を開いて女性に抱きつこうとした。だがそれを女性はさつとした身のこなしで交わすと、とりあえず料理をテーブルに置いてから、半裸の青年に敵視を向け大声で怒鳴つた。

「私の背後に立つな。風呂上りにバスタオル一枚で出てくるな。着替えを置いておいたはずだ。今すぐ戻つて着替えろつ」

「寒い」

そりや そうだろう、青年はあまり気温の高くないこの季節に申し訳程度で身に着けたバスタオル一枚とびしょ濡れ姿で風呂場から廊下を歩いてきたのだから。

女性はハタリとあることに気がつき、サッと床を見下ろしてみた。

予想道理に床は水浸しで、お気に入りの絨毯が水玉模様になつている。

「体を拭いてから出て来いっ。礼儀をしれっ」

女性の怒鳴り声がまた響き、情緒不安定な麻薬常習犯は悲しそうな顔でトボトボと元来た道を戻つていった。この調子だと廊下もびしょ濡れなのだろうと女性はため息をつき、雑巾をとりに台所を出ると調度家の電話が鳴つた。

「はい…」

「あーもしもし?」近所の方から五月蠅いと苦情が来ているんですがねえ。もう少し時刻を考えてはいただけないでしょ?「うかねえ?」その嫌味たつぱりの管理人からきた苦情に女性は慌てて平謝りをし、また大きくため息をついて悲しげに受話器を置いた。

此処はアパート。深夜に大きな音を立てるのは厳禁だ。

何故か女性があらかじめ用意してあつた青年用の大きめのTシャツとジーンズに彼は疑問をおぼえることも無く着替えて、タオルを頭からかぶるとのそのそと台所まで戻つてきた。

テーブルの上で美味しいそうな料理が良い匂いをさせていたが、残念なことに青年は料理が温かいうちに手をつけることを許されなかつた。

「「」飯ー。何すんだよー。食べたいー」

「その前にすることがあるだろ?」

青年は台所へ入るやいなや女性に手を引かれ、リビングまでつれてこられる。皮のロングソファに座られ、女性はドライヤーとなにやらスプレーのようなものを数本持つて来た。腹が減つたとブーブー文句を垂れていた青年は、女性にかけてもら

うドライヤーが気持ち良いらしく、次第に大人しくなってきて、今度は蝶々さんが見えたと楽しそうに手を伸ばしていた。リラックス気分なのは青年だけでなく女性も同じだった。美しい物に目がない女性は、帰宅後に美人が出迎えてくれる事を内心激しく感動していたのだ。

蝶々さんを追つて伸ばす細い腕も、のばせてウル目の瞳も、高飛車を連想させる高い鼻も。全て女性の心を強く刺激する代物で、美しき原石に創作意欲が高まるばかりだった。感情を表に出さない女性は消していくやうにやけたりなどしなかつたが、悶々とフイギュアの手入れをするお宅ながらに髪を乾かしていた。彼がスカートをはいていなくて本当に良かつた。もしはいていたら、きっとミニスカートをペロリとめくついていたかもしれないから。

まさか其処までしなかつたとしても、仕事でためたストレス発散のためにこの美人さんをどうしてしまおうか……背後であられもない妄想を膨らませる女性に少しばかり警戒をしたほうが身のためにあるといふのに、彼の心は蝶々さんなどといふふざけた幻に夢中だつた。

せつかく乾かした髪にスプレーを大量に吹き付ける女性が気になつたのか、彼の意識がやつと幻から引き戻される。

「なんでもまた濡らすんだー？ せつかく乾いたのにー。めんどくせえ奴だなー」

「こうすればいつそう綺麗になるからだ……大人しく前を向け。目に入るぞ」

もういいよー、と青年は細い腕を伸ばしてスプレーを一つ取り上げたのだが、女性は待つてましたとばかりにもう一本スプレーを取り出した。青年は苦悶の表情を浮かべ、戦利品のスプレーを手の中で遊びながら呟くように話しかけた。

「俺のこと綺麗にして楽しい？ 俺、全然楽しくないんだけど」

呟く青年の声はドライヤーの音で届かなかつたのだろうか？ また

答えを返してくれない女性に、青年は懲りずに話しかけた。

「ねー。なんで俺のこと綺麗にしたいのー？」

ドライヤーにかけられる事はありえない音量で声を上げると、女性に怒られてしまった。

「大声を出すな。深夜だ」

また怒られてしまつた青年は、子供の様に頬をふくらませパタパタと足を動かした。麻薬常習犯は時々子供帰りをしてしまうようだ。女性は困つた様に眉を寄せ浅くため息をつくと、ドライヤーのスイッチを切つて零すように返事を返し始めた。

「私が醜い人間だからだ。だから綺麗な物を作りたい。傍に置いておきたい。私の物にしてしまいたい……」

青年は少し潤いを見せ始めた髪をなびかせてグルリと後ろを向いた。不思議そうに首をかしげると、そつと女性の頬に手を添える。

「んー。あんた、美人さんじやん。それ整形とか？」

「そちらの醜さではない。酷い仕事をずっとしてきた私の内面が……」

「へえー。心が醜いとか、つまりそんな恥ずかしい事言いつもりなんだ？ やだねー。俺そういう事言う人大嫌い」

思わず女性は言葉がつまつてしまつた。こんな青年に話をしても解つてもらえるわけがないのに、何を期待して話しを始めてしまつたのだろう？ 頬に添えられた手を冷たく払い、女性はドライヤーとスプレーを片付け始めた。

「もう良い。晩飯を食え」

寂しそうな女性の後姿に青年は悪い気になつてしまつて、彼女のフォローに入ろうと考えをめぐらせ始めたが、麻薬に犯された頭は長く同じことを考えていられない。

蝶々さんの大群が襲つて来たーつ。とまた大声で騒ぎ始め、彼女の家の電話が鳴り出した。



## 五話・イフ近し

女性に監禁される生活もなかなか居心地が良かつた。

毎日スリや恐喝をしなくても食える飯に、暖かい寝床。身の回りの事を全てやると言つても、女性は青年を無理に押さえつける事もなかつたし、また青年の趣味も尊重して服もアクセサリー類も合わせて買い与えてくれた。女性が仕事に行つている間は自由に外で遊んでも良いし、無断外泊も時々なら許してくれる。

何よりも良いのは、高い金を払わなくても麻薬が手に入る事。

「毎日栄養あるもん食つてるからかな。なんかこの頃麻薬に翻弄される事もなくなってきた気がする」

呑氣なことに、青年は麻薬が日に日に薄い物になつていつている事に気がついていなかつた。真顔でそう話す青年の爪を研ぎながら、女性は良かつたなと氣の無い返事をして、また爪研ぎに夢中になる。十本全ての指が終わると、今度は足の爪までやつてこようとしたから青年は無言で立ち上がりそれを拒否した。青年は台所に行き棚からワインを一本取り出してコップに注ぎはじめた。ワインは女性の趣味だったが、青年もこの頃ワインが好きになつてきただ。今ではワインが切れると愚図るようになつてしまつてているから、女性は毎日のチェックを怠らない。そのかいあって、青年が愚図ることも随分少なくなつた方だ。未だにテレビの予約ができるいなかつたぐらいの事ですねてしまつこともあつたが、それも女性が気をつけているかいあつて滅多に無くなつた。おかげで青年は日々を快適に過ごしている。

「道端で迷子になる事もなくなつたか？」

「ん」

爪を研いでいた物を片したらしき女性は別の袋を持って台所にいる青年を追ってきた。

まだまだ初めの頃は麻薬の濃度も濃く、青年は道端で突然迷子になつては麻薬が切れる頃にやつと思い出して、機嫌悪そうに帰つて来ていた。

「持つていつたはずのチケットが無いと言つて、近くにいた人間を掏り呼ばわりしなくなつたか？」

「ん」

青年はインディーズのROCKバンドにJUJUにて、たびたびライヴに出かけてはチケットを部屋に忘れて行き、拳句の果てには近くにいた人間をひつ捕まえ、俺のチケット返せなどと怒鳴つていた。ちなみに警察に引き渡された青年を取りにくるのはいつも女性の役目だった。

「歯磨き粉とわさびを間違えなくなつたか？」

「ん」

わざわざ冷蔵庫からわさびのチューブを取り出して、洗面台に持つていいくとそれをブラシにつけて何のためらいもなく口に入れる日が一週間に一度はあった。泣きじやぐる青年の口に慌ててアイスを突つ込むのも女性の役目だった。

「公園の池に落ちなくなつたか？」

「ん」

この寒いのに、青年はお魚さんと友達になつたから竜宮城に連れて行つてもらえると勘違いして、池の中にだいぶすることもあった。せつかく綺麗にした体をドロドロにして帰つてきた青年に女性は毎回真つ青な顔を見せて、急いでバスタブの中へ投げ込んでいた。ちなみに、竜宮城は亀が連れてつくれるもので、池ではなく海にあるのだと昔話を聞かせてやるのも女性の役目だった。

そんなことも大分無くなつた今、女性は青年の日々の成長に感動し、また物悲しさを感じて、彼に一つプレゼントをすることにしたのだ。

「なら、コレをお前にやるわ」

女性が持つてきた袋の中には最新の携帯電話が入つていて、説明書と充電器もキチンと添えられていた。青年は女性の家に来たときから携帯を持していなかった。見た目からしてもめずらしいことだと思つたが、理由を聞けばなんてことは無い。ただたんに、麻薬常習犯は自分の物をそこら辺に置いてきては、何処に置いたかなど忘れてくれる。携帯も持つていたのだろうが、何処かへ忘れてきたようだ。

しかし、今なら携帯を持たせても忘れてくることは無いだろう。そう思つた女性は昨日、最新で芸能人も持つているとかで有名だった携帯電話を青年のために買つてきていたのだ。

「へー。最新じゃん」

「登録番号一番に私の番号がある。何かあつたらかけり」

携帯電話に気をとられた青年は、せつかくついだワインを飲むのも忘れて、さつそく色々試してみていた。

案外に嬉しそうな反応を示す青年に、女性は母親のような満足感を得てうんうんと頷いた。

「ん？ なんかデータフォルダに一件入つてる」

「カメラで私の写真を撮つておいた。恋しくなつたらいつでも見なさい」

フォルダを開いた青年はなんと反応して良いのか解らず、苦悶の表情で画面に見入つてしまつ。女性は少しも笑わずに、いつもの黒スレーブでネクタイもきちんと締め画像の中に胸から上を収めていた。何かの証明写真と勘違いしているんじやなからうかと、青年は恐る恐る女性を見上げたが、彼女はやはり満足げな顔で頷くだけだった。まさかそんな彼女に、こんな画像いらないとも言えず伺うように礼を述べると、女性は更に満足そうな顔で照れたように顔を赤くしていた。

あとで「ひとつ消しておこう」と心に決め、青年はワインを一杯飲み干した。

クリスマスが近くなると、町は幸せそうな顔で金のかかつたプレゼントを持ち歩き、ショーウィンドウから見える甘そうなケーキに気をとられて財布をすられたことにも気がつかない阿呆ばかりで埋め尽くされる。

世間一般的な家庭ならば、そろそろ一年に一度のイベントに準備を始める頃だろう。しかし女性は馬鹿らしいとでも言わんばかりに普通に生活をしていた。以外に青年の方がクリスマスを意識しているようだ。意識していると言つても、遊び人の青年はクリスマスになくなつたパーティーやら、宴会やら、お呼ばれのせいで意識せざるおえない状況であるというだけなのだが。

もともと五月蠅い事が嫌いな女性だつたが、青年がクリスマスだと騒ぎ立てる事に関してはあまり不快に感じていなかつた。それといふのも、美しいものが好きな女性は、彼が嬉々とクリスマスを満喫する姿もまた魅力と感じていたからだ。

自分と違つて友達と呼べる人達が大勢いる青年。自分と違つて少しのことではしゃぎ、また怒り出す青年。自分と違つて汚職に手を染めていない青年。

自分と違うものがこんなにも魅力的に感じるのだとは思つてもみなかつた。

冷蔵庫から缶ビールを取り出して、リビングへ戻つてくる青年を見つめながら色々と思いをはせていると、青年は不思議そうに自分の身体を見まわした。

「なんだよ？　何処も汚れてねえだろ？　今日のケアは全部終わつたんじやねえのかよ？」

「別に……。何処も汚くなどない。綺麗だ」

ブシュッと炭酸の弾ける音がした。ビールを一度あおる青年はどこぞのオヤジさながらに手を腰に当てるとい、女性の方へ首を突き出して睨みつける。

「じゃー、そんな不満気な顔でずつと見てんじゃねーよ。ムカツク

だが、「

せっかく女性が褒めているのに、青年は相変わらずつれない態度だ。しかし、それにも慣れてしまった女性は無言で青年から視線を外し、テレビのスイッチをつけた。

青年からしてみれば、つれないのは女性の方だった。

せっかくの一大イベントであるクリスマスに若い女が騒がないとはどういうことか？ ために遊びに誘つてみても、いつもと変わらず断りをいれてくるだけ。自分の相手をするのはケアの時と我慢なお買い物の時だけだつた。仲間には良いヒモ女ができて良かったなと羨ましがられる生活であることには変わりないし、青年としても欲しいものがなんでも手に入るお姫様生活に文句などなかつた。それでも最近満たされないものを感じてきたのは、女性にもらったあの携帯電話のせいだ。

いつでもかけるといつたくせに、何故電話に出ないのだろう？ 何故メールの返信をしてこないのだろう？ 別人が電話に出なくとも、メールを返してこなくとも、たいしたダメージにはならないだろう。しかし、青年はこの女性にシカトを食らわされることだけはどうしても納得がいかなかつたのだ。

どうしてだ？ 僕を求めてるんじゃないのか？ 僕が欲しいから、こんな監禁まがいなことをさせてるんじゃないのか？ 僕が心配だから携帯を持たせたんじゃないのか？

理由を聞いたとしてみても仕事が忙しいとしか答えることなく、その仕事はなんだと聞いても口を濁すばかり。ついでに、何故そんなに大量の飲みもしない麻薬を所持しているのかと聞いても、答えてくれることは無かつた。

まんまと女性に騙された。てっきり自分は女性にとつてかけがえのない存在で、いなくなると困る人で、寵愛を一身に受けるべき人間なのだと高をくくつていたのに、この仕打ちはどうゆうことだらう

か？ このフレーズだけを聞けば、青年が女性に恋をしているように聞こえてしまうのだが、それも許せない事の一つなのだ。

まだ出会って間もない女に恋をするほど単純な青年ではない。なのに、電話やメール、日々の会話までシカトを噛まされてしまうと、まるで自分が女性を求めているようではないか。一人のまともそうな人間を、自分の虜にさせたと得意げになっていた青年にとつて、これはプライドが大きく傷つく出来事なのだ。

イライラと手に力を込めていると、缶ビールがつぶれてしまった。中の液体は惜しげもなく青年に降りかかり、ベタベタの身体を演出させてくれた。

「ベコ」という、尋常でない音に女性はさつと振り向き、廊下へ続く扉を指差すと機械の様に一言発した。

「風呂」

冷たい。実に冷たい。

青年は缶ビールを床へ叩きつけると肩を怒らせて部屋を出て行つた。女性は動じることなく後始末に取り掛かる。

クリスマスイヴまであと二日。

麻薬を噛み碎く青年は酒場でぐつたりとよれていた。すっかり馴染みになった光景だ。店のマスターも特に気にすることなく、店のツリーを飾っている。

しばらくすると、麻薬で良い気分になってきた青年が、面白半分でマスターをなじりだした。

「花のクリスマスも、お店に出てせかせか働く氣？ やだねー、楽しみを満喫できない大人つてさ」

麻薬を噛み始めて5分後、今日も青年はいたつて正常に罵声を吐こうとしている。あと5分後には取つて返した様に甘えた声を吐き出すだろう、と考えながらマスターは時計をチラリと見た。

「君は、クリスマスにどうやって楽しむつもりなんだい？」

あと5分間は我慢してやううと、マスターは気の無い返事で聞き返した。

「えー？ そりや、仲間と騒いで、飲んで、食つて……あー、楽しみだなつ。サンタさんくるかなあー？」

「サンタさんは、夜しつかり寝る良い子のところにしか来ないんだよ、にーちゃん」

「じゃー、大丈夫だ。俺、イヴの夜は予定入れてねーもん」

今まで興味が無いと語っていた、マスターの背中がぐるりと向きを変えた。

青年が大事なクリスマスイヴに予定を入れていないと、一大事だ。

昨日も、一昨日も、此処で飲んだくれていた青年に寄りかかりながら甘く囁く女性達は、つまり皆、断られたと言つわけだ。これは理由をしつかり聞かないと、此方が眠れなくなってしまうと、マスター

一は怪訝ぞうな顔でたずねた。

「そりや、また…。サンタの存在を未だに信じている訳じやないだろ?」

「信じてねーよつ。馬鹿にすんなよなーつ」

麻薬常習犯は怒りを露に、バンバンと机を叩き始めた。

「予定はあるのーつ、でも無いのーつ」

「どうこいつ意味だい?」

話を促すマスターを気にとめず、青年はポケットへ手を突っ込んだ。最近の若者は何を持つているか解らない。それも麻薬常習犯とくれば、刃物一つ出てきたって可笑しくはないだろう、思わずマスターは恐怖に身体を強張らせた。しかし、出てきたのは携帯電話だった。不機嫌な顔で、携帯の短縮ダイヤルを押した青年は、耳に携帯を押し付けて数回なる「ホールを大人しく聞いていた。しかし、留守番電話サービスにつながると態度は豹変し、思い切り携帯を床に投げつける。

「あーつ。なんであの女出ねーんだよつ！ くそつ、死ねつ」

「ああ、なんだ。目当ての女に逃げられてしまったのかい？」

青年の怒りの矛先は、マスターに変わってしまったようだ。マスターの推理を聞くなり、青年は酷い形相で睨みつけ、今にも殴りかかりそうな勢いだった。

「田舎でにしてる訳でもねーし、逃げられてなんかいねえよつ。家、帰りやー時じろには帰つてくんだ」

「あ…ああ。あのヒモ女性のことかい？」

そこまで聞いて、やつとマスターは青年が良く話題にだす女性の存在を思い出した。青年の世話をし、服を買ってやり、アクセサリー類もそろえ、魔法のようにお金を出して青年に小遣いを「える、不思議な女性の存在を。

青年のお金の使い方は尋常じやない。毎口金をばら撒くよつな使い

方をしている青年を見ていて、最高一ヶ月だなどふんでいたのに、青年は今ものうのうと金をばら撒きにくる。青年の身なりもどんどん良くなつていき、毎日裕福に暮らされてもらつていいことが手にとつて解るようだ。

そこまで手にかけた青年から、電話やメールがくればそれなりに嬉しいだろうに、彼の話から推測すると、一度も応対されていないらしい。

変に詮索好きなマスターは、色々順序立ててまた推理を始めた。

「もしや、その女性…。まあい仕事でもしているんじゃないのかい？」

麻薬常習犯は急に子供のようなキラキラした顔で、ふんふんとマスターの話を聞きだした。五分が経過したようだ。それをいい事にマスターの推理は続けられた。

「実はその仕事というのが売春夫の売人で、君を綺麗にしたあと、麻薬付けにして何処かに売り飛ばす氣でいるとか……まともに話をしないのは、君に情が移るのをふせいでいるから……とか」  
言われてみれば確かに合点のいく話しだ。あんなに麻薬を持つているのは何故だろう？ 一人身の女性が金をあふれるほど持っているのは何故だろう？ 仕事の内容が明かせないのは何故だろう？ 自分を綺麗にするのは何故だろう？

「うわーっ、まずいじゃんっ。俺、売られちまうのかよっ

「断定はできないが、少し警戒した方が良いぞ？」

話はどんどん変な方向へずれていく。

酒場から青年はいつもより早く退散した。家に戻つて女性の仕事を調べるためだ。いつも入れてもうえない鍵つきの部屋を、ドアを蹴破つても進入して真実を確かめてやると意気込んで帰つたは良い

ものの、玄関に女性の靴がキッチンとそろえて置かれているのを見てキヨトンとしてしまった。まさかと思い、いつものリビングに向かうと、女性がソファーで本を読みながらくつろいでいたのだ。この時間は仕事にいっているはずだ。指を指してあわあわと口を動かしていると、女性はチラリと青年に視線を送つてまた本の字を追い始めた。

青年はカチンときた。

また、シカトか。この屁つ。おかえりくらこ言えつてんだ

「よお、早えじやんか。此処で何してんだよ」

「此処は私の家だ。くつろいでいちゃ悪いのか？ 仕事がひと段落ついたのでな。今日はもつ休みをもらえたる」

思わず青年はギクリとした。ひと段落とはどいついうことだろ？ まさか自分の売り込み先が見つかったのではないか？ いや、それより、休暇をとられては、あの秘密の部屋の中を探ることもできないじゃないか。うんうんと唸つて苦面をみせる青年に、女性は不思議そうに質問を返してきた。

「お前の方こそ、今日は早いんだな。あと2、3時間は酒場で飲んで、そのあとナンパした女とホテルへ行くか、カジノへ遊びに行くはずだろ？」

そのセリフを聞いて、青年はさらにギクリと身体を震わせた。何故、女性が自分の行動パターンを知っているのか？ 帰りがいつも遅いといつても、女性よりは早く帰つてくるし、帰れない日は外泊をしているのに、何故この時間に帰るのが早いと解つたのか？

疑惑は更に深まるばかりだ。

「あんた……俺のことつけてるの？ それとも探偵かなんか雇つて調べさせてるのか？」

「携帯の発信機がそつ語ってくれる」

携帯に発信機がついているだなんて初耳だ。初めに携帯をもらつた時は、そんなこと一言も言つていなかつたはずだ。つまり、自分が何処へ逃げても良いように、内緒で取り付けたという訳か。まんまとやつてくれたものだ。

「あんた、何の仕事してんだよつ。俺を何処へ売り飛ばす気だつ。正直に全部言えつ」

「……渡す麻薬を間違えたか……？」

いきなり意味の解らないことを叫ぶ青年を見て、女性は渡す麻薬を間違えてしまつたのだろうと思った。毎日薄めている麻薬を、濃い物と間違えて渡してしまつたのだろうと。

「麻薬……？ やつぱ、ヤク漬けにして売り物にする気だつたな、てめえつ。もう、薬は止めるつ。絶対飲まねえからなつ」

今のは麻薬に魅了された人間がそうそう口にできるセリフではない。ということは、麻薬は間違えて渡していいはずだ。

となると、ますます不思議な話だ。いつたい何を根拠に青年がそんな会話を始めたのかさつぱりわからない。

「麻薬を止めるとは良い心がけだ。しかし、いつたいどうした？ お前は何の話をしているんだ？」

「今更とぼけても無駄だぞつ、証拠は秘密の部屋にしつかりあるんだからなつ」

ついでに言つておくと、女性は青年で言つ秘密の部屋の意味もよく解らなかつた。しかしタツと駆け出す青年の方向に、見られたくない部屋があることは確かで、女性はサツと立ち上がり、二人が通るには狭い廊下をスルリとすり抜け、青年の先回りをした。

「お前の言つていることがさつぱり解らない。それにお前が見たがる部屋にはろくな物は置いていない」

「じゃあ、見せろつ」

青年も女性と同じようにわきをすり抜けようと試みるが、女性の瞬発力は並みのものではなかった。ことじとく青年の動きを封じる女性に頭にきた青年はとうとう力技に任せることにして、ガツと女性の肩を掴みじけさせようとする。

「女のお前にじびつされると程落ちぶれてねーんだよつ、怪我したくなかつ…」

これは幻だらうか？ やはり女性は麻薬を間違えて渡していたのだろうか？

いつのまにか青年は床に押し倒され、天井に睨みを利かせるはめになってしまっている。いつたい女性は何処でそんな体術を学んできたのか？ やはり売人ともなると危険な目にあうのは慣れててしまっているのか？

「お前の肌に傷がつくのは忍びない。頼むからあきらめてくれないか？」

申し訳なさそうな声とは裏腹に、女性はしつかり青年のツボを抑えて放さない。青年は小柄で華奢な女性に押さえ込まれた事が恥ずかしいやら情けないやらで、子供のようにジタバタと身体を動かすがまったく効果は得られない。

せめてもの反抗として女性を睨み付けたが、その瞬間彼は息をのんでピクリとも動かなくなつた。

仕事帰りの女性の黒いスーツは前が開けられていて、なかに拳銃が仕込まれているのが丸見えになつていた。

仕事から帰った女性が仕事着を着崩して最近買った本に読みふける。あたりまえのような行動に女性は今更後悔をした。せめて部屋着に着替えていれば。銃だけでも部屋にしまってくれば。しかし今はそんなことを嘆く時ではない。何か良い解決策を探すことが正解だ。大人しくなった青年に警戒しながらも女性はゆっくりと距離を取る。「お前が麻薬に犯されていたのならばまだ開放することもできた。しかし、見られたからには方法は三つに絞られる」

「三つ？」

青年は目を細めながら上半身をのろのろと起こす。女性に抑えられた箇所が痛むのか片手で色々な場所をさすっている。

「お前を鎖につないで他言わせない様にするか。共犯にしてしまいか。殺すかだ」

「ど、どれも良い選択肢じゃねえなあ……」

青年はへらつと笑顔を見せてみるが、女性はそれに答えようとしない。状況が状況なだけにともいえるだろうが、もともと女性は笑顔に笑つて会話を返せるようにできていないのだから期待するだけ無駄だろ？

「共犯って…売春夫を見つけて来いとか、俺が稼いでこいとか？」

青年の一言で全ての話は振り出しに戻ってしまう。女性はなかなか進まない会話にいらつていらつていらつてこらの小さく舌打ちをした。それでも少しは青年の言わんとすることが理解できたような気がする。

「お前は、私の仕事をなんだと勘違いしている？ お前を何処かの色好きに売つて儲けようとしているとも思つているのか？」

「そりなんだろ？」

これには女性もあきれるばかりだ。どこからそんな破廉恥な情報を得てきたのか。それよりも、そんな馬鹿らしい理由で今まで保ってきた青年との距離を崩さなければいけない事になるとは思つてもい

なかつた。

こんなことになるくらいなら、さつさとあの部屋の扉を鉄製の物に変えておけばよかつたと、女性はしてもしかたない後悔をまた繰り返してしまつ。

「もう、そんなことはどうでも良い。早く選べ」

「選べつて、三つから？ ハハ…、ちょっと待てよ。」  
「もうのは慎重に、ゆづく…」

青年は勢い良く身体を飛び起こして転びそうになりながら狭い廊下を逆に走つた。

逃げたのだ。しかしそれも無駄だつた。命の危機ともあって必死に走つた青年だつたが、腕を乱暴にひねり上げられ首を掴まれたかと思つと壁に思い切り押し付けられていた。女性の鋭い視線が青年を捕らえていた。けして彼女は睨んでいるわけではない。それでも冷たい視線は十分に青年を凍りつかせる事ができた。

力チリと銃口が青年の首に添えられた。もう選択肢は「えてもられないのだろうか？

あ、やばい。俺死ぬかも。でも…いや…

「本当は死ぬ事が怖くなどないのだろう？」

「ばつ…馬鹿野郎つ、怖いって。怖いに決まつてんだろ？」

怖いから…だから…

女性は訝しげな表情を浮かべ、垂れてきた長い前髪を首をかしげてどかせた。

「麻薬に魅了されたお前は死にたがつていた。こんなふうに銃口を向ければ嬉しそうにトロンとした顔で大人しくしていたぞ」

初め青年は口許しをヒクヒク引きつらせながらも笑顔を保つていた。しかし女性の一言を聞くたびに彼の眉はひそめられていく。追求されるのが嫌だと思いつ切り態度で表しているのだ。それでも女性は聞

かなければならなかつた。死にたいのなら今此処で苦しみもなく一瞬で殺してやるつ。あのとき叶えてやれなかつた夢を青年に『『えてやろう』』と思つていたからだ。

「麻薬は人の本心を引き出していく。本当は死にたいのだろう?」  
青年は後ろの壁を指でさすつた。本音を『『いつこと』』、『『うとうなためらい』』を感じているらしい。

「答えを返さないのならば勝手に解釈をさせてもらひ。痛みはない。次に生まれ変わる時はもうすこしまともな人間になるんだな」

「まつ、待て、待て。死にたくない。いや……違う。じやなくて『『混乱しているのだろうか。青年の言葉はおぼつかない。一言を呟くように何度も繰り返し、自分で確かめるように重くゆづくり吐いている。』』

不意に決心を固めた青年は、女性をしつかり見つめて、一筋の冷や汗を流しながらしつかり言つた。

「共犯。共犯が良い」

「そうか……」

静かに答えた女性は構えた銃口を下へゆづくり下ろし始めた。やつと死の危機も去り、青年が安堵にホツと一息ついた時だつた。腹から心臓へ駆け抜けるような鈍く低い爆音と、脳裏まで突き上げるような鋭い痛みに襲われ、青年は絶叫をあげながらその場に蹲つた。

綺麗な廊下に血飛沫が上がり、今はポタポタと血溜まりを作つてゐる。

「……つぐ。何して……」

痛みに涙を零し始める瞳で、青年は女性を睨み上げた。下がつた銃口は彼の脚を狙い、かするほどの損傷とはいへ、銃弾が彼の脚を突き抜けた事には変わりない。

女性は何も言わず銃をしまつと、何事も無かつたように青年から離れた。すぐに戻ってきた女性の手には、透明な救急箱が握られていて

る。

血が滲み出すジーンズの箇所だけをナイフで大きく裂き、テキパキと慣れた手つきで処置を始める女性は酷く残念そうに呟いた。

「せっかく、此処まできめ細かい肌に直したのにな。残念だ」

「 つだから、何してんだつ。くそつ…痛つてえつ」

それ以外にも文句や罵声は沢山思いついたが、そんなことを言う余裕も無い青年はそれ以上声を出さなかつた。無事な方の脚を立てて、膝に顔をつけると必死に痛みと戦い始める。

女性は手を休めることなく答えた。

「お前を信用できない。今はこつしてお前が逃げられない様にするのが正解だ」

経験したことの無い痛み。青年は人生の中で痛みよりも快樂の方を多くとつてきた人間だ。不意に意識は途切れ、女性が信用できないと言つたのを最後に聞き取つて、壁に背中をこすらせながら横に倒れた。

クリスマスイヴまであと一日。

## 八話・ターゲットは少年

青年が目覚めたのは、もう嗅ぎ慣れた洗剤が香るフカフカの白いベッドの中でだつた。其処は青年の自室。女性が使っていない部屋を青年に与えたものだ。

身動きしようとして悲鳴をあげた。脚を蝕むような痛み。

「いてえ…痛い、痛い、痛い、あー、くそつ」

青年はなんとか上体だけ起こし、力任せに白い壁を殴つた。大きな音に気がついたのか、数秒後に女性は悪びれる様子も無く扉から顔を出した。

「五月蠅い。壁を叩くな。隣から文句を言われる」

それどころか女性は青年にシャー・シャーと説教を垂れていでないか。女性の涼しげな表情が増らしくて、すぐに殴り飛ばしたい気分だつたが、何しろ肝心の身体がそれはできないと訴えているのだからしかたない。

「お前一人で此処まで運んだのかよ」

もしそうだとしたら少し困つたことになる。案外女性は力も強いのだということになつてしまつては、自分に勝てる事が一つも無くなつてしまつからだ。そうなれば自分の身の安全は保障できなくなる。

「いや、同僚に頼んだ」

同僚。それはますますマズイ事になつた。呼んでもすぐにくる同僚がいると言つことは、近くに住んでいる可能性が高い。逃げたとしても何人いるかわからない同僚に手分けして探されればすぐに見つかってしまうだろう。

お先真つ暗な運命に、青年は力なく壁に寄りかかつた。

「あつのが……絶対誰にも言わないから見逃してくんない？」  
「もちろん、答えに期待などしていのだろう？お前を信用できない」

女性はスタスタと青年の近くまで歩み寄ると一枚の書類を差し出して来た。受け取らない青年に気がついた女性はハラリと書類をベッドに落とし、そのまま出て行こうとした。

「まで」

青年の諦めた様な声が低く彼女を呼びとめた。

「何？」

呟くように聞いた青年の細い指の間で書類が踊っていた。

「読んでおけ、覚えておけば仕事の役に立つ」

青年は書類の一番目立つ箇所。顔写真らしきものをマジマジと見つめた。隠し撮りの様に撮られたその写真の中央には楽しそうにボルを抱きしめる少年と、その少年を幸せそうに抱きしめる紳士の姿が写っていた。

紳士の茶色いチェック柄のスーツと、いかにも金持ちがつけるといった片眼鏡。胸ポケットからは懐中時計のチーンが優雅に垂れていた。

横の文面に視線を移すと、名前、出生や血液型。趣味や毎日の基本活動まで詳しく書かれているその書類はどうやら紳士ではなく少年のものようだ。お昼寝や、ボール遊びの予定が入っているのだから間違いないだろう。

「だから、何？」

「私の仕事は、邪魔者の排除だ」

青年の喉がゴクリと音をならせて唾を飲み込んだ。

「これは売人なんかよりもっとやばい。」

「あんた、殺し屋？」

「違う。少しな

「少しつてなんだよ？」

女性はほどんど出かけていた身体を部屋へ戻し、窓際の小さな椅子に腰掛けた。

髪を左耳にかけると、背もたれに背をつけ細い脚を組んだ。女性は部屋でもけしてスカートをはかない。

「詳しく述べ話せない。簡単に言えば、私はとある組織のメンバーだ。殺し屋は金をつまれれば誰でも殺しに行くが、私は社長の命令が無ければ動かないし、動けない」

青年は眉を寄せ、軽蔑するような視線を女性に送った。

「詳しく述べ話せない？ 何言つてんだよ、俺も仕事の手伝いするんだろ？ だつたら……」

「お前が信用できない」

まだ話を続けようとした青年の声を、女性の鋭い声がさえぎった。それでも負けじと文句を言おうとした青年だったが、女性がその後話しを続けたため、黙る事しかできなくなってしまった。

「もし、お前が仕事に失敗した時。ターゲットに逆に捕まつてしまつた時。ペラペラと此方の事を話されても困るからな」

青年はうんざりと両手を上げてパタパタさせる。もういい、と何度も繰り返して女性に書類を突き返そうと差し出した。

「書類間違ってるだ。このガキのことなんか知つてどうすんだよ」無作法に手を突き出す青年を女性は冷めた視線で眺めた。そして彼女の言葉は更に冷たさを増して世界に生み出された。

「殺すのは少年の方だ」

驚いて、舌を緩く噛んだ。目を見開き、もう一度書類に視線を移す。どう見たって少年は6歳か7歳といった年。まだ誰かに恨みを買われる年でもなければ買つ年でもない。こんな少年を殺して何の得があると言つただうか。

「なんで、こんな」

「その少年の父親が我々に裏切り行為を働いた。今後そのような事が無いように、見せしめとして子供を殺す」

青年は書類が破れそうになる勢いでベッドに叩きつけた。そのまま書類を握り締めたため、本当に破れてしまう。

「今のは説明のつもりか、あ、おい？ イ、カ、レ、テ、ル」

歯をむき出しにして、青年は自分の頭を指差して見せた。

しかしそんな挑発に乗るのはこの青年くらいのものだ。女性はあきれたと目を細めて挑発をさらりと返した。

「仕事が嫌ならそう言え。まだ選択肢は一つも残っているだろ？」「

そう言いながら女性が取り出したのは昨日と同じ拳銃だ。それを片手にゆっくりと青年へ歩を進める。

「わー、馬鹿、馬鹿つ。言つてねーつ、言つてない。お前、こんな真つ昼間から撃つ気か？」

そう言つてから青年は気がついた。当たり前と言えば極自然な事。すぐに気がつかなかつたのがおかしいくらいだ。昨日の銃声は隣近所に聞こえるはずだ。自分が大騒ぎしたくらいですぐに苦情を言いつけてくる隣の住人。彼等ならば銃声が聞こえれば何事かと管理人に報告するはずだろ？

「よーし、良いぞ、撃て。いや、まで、殺すな。俺に向けるな」

女性は皮肉つた口元を作つて笑つてみせた。彼の言いたい事が解つたのだろう。急に撃つ気がうせてしまつた彼女は、銃を懷へ戻した。「変に期待をさせておくのは同情を引くものだな。だから教えておいてやるつ。このアパートは我が社経営の元にある。つまり住人も管理人も同業者だ」

破れしまつた書類をベッドから取り上げ、女性は鉄製のゴミ箱の所まで持つていつた。ジッポで書類に火をつけるとそのままゴミ箱

の中へ落とす。鉄製の箱の中で寂しく燃え上がる書類を、青年は更に寂しそうに眺めた。

「接触する機会はすぐ近くにある。今度この父親の経営する会社で、イヴにパーテイーがあるらしい。著名人を集め自分の名を売ろうとしているようだ。其処でお前にはアパレル関係の仕事に携わる社長の御曹司として潜入してもらひ」

まだ、少年殺しに加担するとも言ひていかない青年を置き、女性は勝手に話を進め出した。青年はうんざりした顔で女性を見る。

「また、たいそうな設定で…」

「……そのパーテイーで上手くターゲットの父親に取り入り、子供を紹介してもらひ。その後、私達はちょっとした騒ぎを起こす。父親が其方に向かわなければならなくなつた時、お前はその少年を連れ出して、外で待機する我々の車へ連れて來い。それで、お前の仕事は終わりだ」

「…終わりつて。殺すのはお前がやんのかよ？」

「時が来たら近くにいたものが殺る。特にだれが殺すなどの取り決めはない」

女性はなんて涼しい声で語るのだろう…青年は背筋が震えた。殺すことをそんなに簡単に考えているのか…近くの者が殺す。そんな簡単なもので良いのだろうか。

青年が鈍い悲しみの痛みに頭を押さえた時だった。玄関のチャイムが鳴る。

## 九話：肩無しガキ大将

サツと女性が銃を取り出し、キビキビとした足取りで部屋を出て行く。いちいち客人が現れるたびに、女性は銃を用意しなくてはいけないのだろうか。不自由な身の上だと青年は女性が出て行くのを眺めた。

少し間を置いて、部屋の外から話し声が聞こえる。一つは女性の物だが、もう一つは声変わりを終えて時のたつた男の声だ。

「ゼロが連れ込んだ男とは上手くいってるか？」

口調は軽やかで、一見伊達男のようだが、声だけで感じる風陰氣には静かな落ち着きがある。かなりの年上を想像していたが、女性と共にその男が部屋へ入ってきて驚いた。

思ったよりも若い。二十代半ばぐらいだらう。驚いた青年をよそに、男と女性は話を続けていた。

「ゼロ…お前にこんな趣味があつたんだな。言つてくれれば俺がお前の着せ替え人形になつてやつたのに」

くすくすとやはり落ち着いた上品な笑を零す男は、女性のことをゼロと呼んでいる。青年は女性の名を知らなかつた。聞こうと思つたことが無かつた訳ではない。けれど聞く必要が無かつた。彼女は青年にとつて良い紐であり、下に見るべき存在。名前など聞かなくても良いと思つた。それに女性の方こそ自分の名前を聞いてこない。それに少し腹立たしさを覚えた青年は、意地になつて聞かなかつたことも事実。

「別に……貴方にはそんな気がまつたく起こらない」

青年は少し優越感に浸つた。現れた男はなかなかのハンサムだつたが、ゼロは彼には起こらない気持ちを自分には抱いている。それは、普段あまり感情を出さない女性に言われるからこそ、価値を持つ。無意識に青年は自分が格好良く見えるであろう表情で、ゼロの隣に立つ男をにらみ上げた。しかし、男は青年の視線とかち合つとにつ

「こりと微笑んできた。心の読めない顔だ。彼が笑顔の下に何を隠しているのかまったく解らない。殺し屋の連中はみな、こんな偽りの表情を持つているのだろうか？」

ゼロも負けずに、真意の読めない表情をいつもしているから。

青年は急に体が冷えるのを感じた。

「そいつ誰」

青年は疑問を投げかけるとこりよりも、少しいらだつたような声で吐き捨てるように言った。恐怖心を悟られないようにと、わずかにプライドで張った声色だったが、両手はしっかりとシーツを握り締めて、かすかにふるえている。

「同じアパートの住人だ」

ああ、つまり同業者ねと、青年は目を細めた。非常にやるしくない状況である。殺し屋が一人も田の前にいるのだ。命の保障はできない。

自分が今まで殺し屋のアパートで寝泊りしていたのかと思つと頭が痛くなる。

青年が頭を抱えて大きくため息をつくと、男がおやつと眉を跳ね上げて青年に近づいた。

「え、な、なんだよつ」

青年はなおも強がつた声で近づく男をけん制しながらも、そのセリフは恐怖でどもつてしまつていて。男に馬鹿にされるかと少し心配してしまつた青年だったが、男がガツト自分にかかるシーツを勢い良く空へ放り投げた瞬間に、そんな小さな心配よりも身の危険を感じて起こつた恐怖の方が圧倒的に勝つていた。

「なんだあ？ ゼロ。拘束具が無いならそう言つてくれればよかつたのに。まだコイツを殺して無いつて事は、監禁して遊ぶつもりなんだろ？」

男はシーツが取り払われた青年の全身を見回しながらそう言つた。

青年は思わず身構えて上げた両手を恥ずかしそうにサッと下に下ろ

したが、男はそんなことはまったく気にしていないようだ。彼らの仕事柄、怖がる人間などめずらしくもないのだろう。ゼロもまったく気にしていない表情で青年に近づいてきた。

「彼は我々の共犯になるそうだ。仲間だ。アリエル」  
男はアリエルとゼロに呼ばれている。青年は粹がつた態度などもう知るかと、疲れきった表情で一人を情けなく見上げた。いい加減恐怖に体を振るわせるのにも疲れてしまったようだ。アリエルと呼ばれた男が不服そうに青年を見下ろしても、もううんざりした視線しか送ることができなかつた。

「俺達の仕事はホイホイ仲間が増えるものじゃないだろ？ 減りはするけどな、ホイホイ。しかも着飾るしか能が無さそつなコレに？」

「冗談が言えるようになったとは思わなかつたよ、ゼロ？」

あからさまな嫌味に青年の文句が飛んでこなかつたのはやはり疲労のせいか。ゼロは一瞬気遣うよつた目で青年を見たが、本当に一瞬なので誰も気がつかなかつた。

「私が冗談を？」

「いや、言つなんて思つてないさ。でもゼロ、オレは反対だ。生かしておきたいなら監禁にしておけよ。社長にはなんて言つつもりなんだ」

ゼロに言つアリエルの声はやはり落ち着いているが、拒否を許さない迫力がこもつていて。大抵の人間ならば逆らえないだろう。いや、普段はゼロも逆らえないのかもしれない。それほどにアリエルの声は勝気満ちているのだ。だが、今回ばかりはゼロの表情も声色も動じず、アリエル以上に気迫のこもつた声で返事が返ってきた。

「監禁は彼の魅力がいちじるしく落ちるからな。出来るだけ避けたい方法だ。彼は共犯になると言つている。私の手伝いをさせるだけだ。社に入れるつもりはない」

アリエルは頭をガリガリと搔き、大きくため息をついて横目でゼロをあきれたように睨んだ。まるで父親が聞き分けの無い子供にするそのようだ。

「オレにはさつぱり、この人形の魅力つてものがわからないね。だから、ゼロ。もしこの人形が少しでも足手まといになるようなことがあつたら、殺すから。それは良いな？」

人形と呼ばれた青年は大きく息を吸い込んだ。アリエルが言った台詞があんまりだと思ったのだ。足手まといになるに決まっているのに、もしそうなった場合には殺すなんて、そんなのはもう殺人予告をされたようなものだ。あくまでアリエルは、可能性の話をしているようなユアンスだが、その可能性が100%なのだから、もしもなにもないだろう。

「そんなこと、貴方にさせずとも邪魔と感じれば私が殺る」

冷酷なゼロの台詞に、青年は更に息を吸い込もうとしてしまつが、初めに大きく吸いすぎたせいか、恐怖のせいか、上手く息は吸えず、喉だけが渴いた音を鳴らした。焦りまじりにゼロを青年が請うような目で見つめても、ゼロはまったくの無反応をよこしていく。

街では皆にちやほやされ、喧嘩も慣れたガキ大将が、この殺し屋二人に囲まれば見る影も無い。青年はとても惨めな気分に押されて、背を情けなくうなだれさせた。

明日はクリスマスイヴ。純粋で健気な一人の少年が殺される残酷な日。あと、もしかすると一人の青年も、臨終かもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1575e/>

---

「merchant of death 死の商人」

2010年12月31日02時13分発行